【春（野菜・花・お茶・生き物等）】

実践①　２歳児　（もんしろちょう）

子どもがブロッコリーの葉についていた卵を見つけてきた。「何の卵かな？」と興味津々の子ども達。ちょうどその頃『はらぺこあおむし』の絵本に興味をもっていたので、「はらぺこ青虫みたいにちょうちょうになるかも」とクラスで飼育ケースに入れ、様子を見ることにした。

毎朝、登園すると観察ケースをのぞき込み、「まだかな？」「アッいもむしになっとる」と卵の変化を友だちや保育者に伝えている子もいた。いもむしになると、えさをあげたり、霧吹きで水をあげたり、保育者と一緒に世話もしていった。するとさなぎになり、ちょうちょうになる日を楽しみにしている子が増えてきた。

ある日、クラスの中でも毎日興味をもって見ていた男児が、「先生ちょうちょうになっとる」と発見し、クラスの子や保育者に伝えた。クラスの子は、「ほんまやー！もんしろちょうや」とみんなで蝶になったことを喜ぶことができた。

（成果）

・身近な小動物に触れ、不思議に思ったり、感動したりする体験ができた。
・自分が発見したことや、考えたこと、思ったことを保育者や友だちに伝える経験や、伝えたことを受け入れてもらえた喜びを味わうことができた。
・自分たちが興味を持った絵本と同じことを体験し、絵本の知識だけでなく実体験することでより良い学びとなった。

実践②　４歳児　（アオムシの生長）

Ａ児が、園庭のレモンの木を見て「先生、この葉っぱ、穴が開いとる」と大きな声で叫び、「ほんまや、穴が開いてるね。探したらもっとあるかもしれないね」と保育者が声をかけると、側にいた数名の園児が他にも穴の開いている葉がないか探し始めた。「ここにも穴の開いた葉っぱがある」、「ここにも」、「あ！アオムシがいる」と言いながらＢ児がアオムシをつかまえた。

周囲の園児も「ここにもおるで」と次々に３匹のアオムシを見つけ、「このアオムシが葉っぱを食べてたんやな」、「面白い食べ方するんやな」とアオムシが葉を食べている様子を観察しながら、「このアオムシ、どうする？」という相談が始まった。

Ｃ児が「先生、虫かごに入れてもいい？」と言い、虫かごを探して４匹のアオムシを虫かごに入れた。「何を食べるんかな？」、「葉っぱ入れたらいいんと違う」、「ミミズ入れる？」、「水は入れたらあかんで」とそれぞれに自分の思っていることや今まで経験したことを話し始めた。クラスでアオムシをどうするのか話し合う機会を設けた。

話し合いの結果クラスみんなで飼育することになった。

（成果）

・毎日目にしている、園にある何気ない自然物に興味や関心を持ち、アオムシの生長を楽しみにしながら、世話をすることでアオムシの変化する様子に気づき、アオムシが蝶に育つまでの様子を知ることができた。
・子ども達と一緒に、アオムシの飼育について話し合い、自分の考えや思いを他の友だちに伝えることができた。

実践③　（びわ茶作り）

園庭のびわの木にたくさんのびわがなり、収穫して食べたり、遊びに使ったりした。好きな遊びで、びわジュースを作っていたＡ児が「本物みたいに飲めたらいいのになぁ」と言ったので、びわの葉っぱでお茶が作れることを伝えると、「作りたい！」と声があがり、びわ茶作りに挑戦することになった。

①葉っぱ選びでは、どんな葉っぱがいいかを自分たちで考え慎重に選ぶ姿があった。
②ブラシを使って汚れを落とす際は、汚れが落ちているかしっかり観察したり、匂いを嗅いだりする姿が見られた。
③葉っぱが茶色になるまで天日干しをしていた２週間程の間は、毎日ネットから葉っぱを取り出して観察し、色や匂いの変化・感触の違いに気づく姿があった。
④葉っぱをちぎって煮出す際は、ちぎるときの音や感触を楽しんでいた。

びわを収穫してからお茶作りまでどんどん活動が広がっていった。ひとりではなく、友達と考えや目的を共有しながら協力して進めていくことで、協同性が育まれていった。

子ども達がやりたいと思う気持ちを大切にしながら、主体的に取り組んだり、工夫したりできる環境や援助が必要である。

実践④　（カエルの飼育）

園の溝や周辺の田んぼでカエルを捕まえて遊んでいた男児たちが、「お世話をするからカエルをお部屋で飼いたい。」と言い、図鑑で飼い方等を調べ、飼育ケースを整えていた。

男児たちはカエルを捕まえることが楽しく、毎日たくさん捕まえてきては飼育ケースに入れた。男児たちは、毎日水換えはしているが、餌をやっているのかが気になり「餌は大丈夫？カエルは生きた物しか食べないらしいよ。」と尋ねてみた。

すると、“餌は気になっていたが十分あげられていない”という内容のことを話し、不安になり困り始めた。そこで「お世話をするということはどういうことか？」について、みんなで考えることにした。

子どもたちは「カエルも狭い部屋は窮屈で嫌やと思う」「汚い部屋も嫌」「ご飯はたくさん食べたい」など自分に置き換えながらカエルの気持ちを考える姿が見られた。その姿を大いに認め、「お世話をするということは、生き物の命を預かるということ、みんながお父さんお母さんの代わりになること」と話をした。その後、男児たちは“このままでよいか”考え相談し、“捕まえてきても、その日の帰る前に逃がす”ことにした。生き物に触れることで命について考えることができた。

また、生き物を大切にし、優しい気持ちで接する姿もたくさん見られるようになり、思いやりの心も育って来た。

実践⑤　４歳児　（プランターから大量のイモムシ）

プランターの土の中に大量のイモムシを発見する。これは、コガネムシの幼虫で根切り虫の一種であり、大人は害虫として扱っている。しかし、幼児は「かわいい」といって何匹も集め「飼いたい」と言う。幼児の思いに寄り添い、飼育・観察する中で、幼虫→さなぎ→成虫へと姿を変えていく過程を目の当たりにし、好奇心や探求心をもつとともに、本物の命を実感することができた。

実践⑥　（おたまじゃくし）

春には幼稚園付近を散歩しに出掛けました。シロツメ草やたんぽぽの綿毛を見つけたり田んぼで"おたまじゃくし"を見つけたりしました。

おたまじゃくしを見つけた子どもたちは興味を示し、「育てたい」と捕まえて持ち帰りました。おたまじゃくしの数を数えたり、育てたりしていくとどうなるのか学ぶことができました。

実践⑦　（砂場遊び）

砂場で山を作ったり、穴を掘ったりして遊びをすすめる中、半分に割った竹を使って水を流したいと考えていた。高低差をつけて竹をつないでいこうとするが、竹のつなぎ目で水が漏れたり、水が途中で止まってしまったりと思うようにいかない様子であった。友だちと一緒に試行錯誤しながら竹の置き方を工夫したり、気づいたことを伝え合ったりしながら遊ぶ姿が見られた。

実践⑧　５歳児　（異年齢でのかかわり）

５月、園庭から園舎前にタケノコが生えているのを見つけ、「タケノコをとりたい」と言い出し、タケノコとりを楽しんだ。タケノコは根がはっているのでなかなかとりにくく、友達と力を合わせたり、採り方を園児たち同士相談したりするようになった。

そのうちに、タケノコが生えている山の上（奥）が気になり、５歳児みんなで探検することになった。傾斜はきつかったが、竹が所々に生えているので、登りやすく、探検隊になりきってごっこ遊びをしたり、大きな穴を見つけて友達と想像して楽しんだり、木々を拾って

楽器演奏のまねごとを楽しむ姿が見られた。
　その様子に、年少児も興味をもち始め、何回も探検してだいたいのことを知った年長児が年少児を誘い、一緒に山に登ることになった。丸太をくぐったり、一本の太い木にみんなで登ったり、座ったり、年長児だけではしなかった遊びも見られた。
　自然の中で遊んでいる子どもたちの表情はいきいきとしていた。怖がったり、なかなか斜面を登りにくかったりする年少児に年長児がそっと手を差し伸べたり、優しく声をかけたり、励ましたりして年少児は安心している様子であった。
　異年齢でかかわる機会をもつことで、年長児のたくましい様子や頼られて嬉しそうな様子が見られたり、年少児の遊びの場が広がったりし、新たな発見や子どもの意欲・好奇心につながると感じた。

実践⑨　（ビオトープ）
　本園には中庭にビオトープがあり、様々な生き物が生息している。四季折々に姿を見せてくれる生き物に園児たちは興味関心が高い。
　春、黒く長いしっぽの生き物を捕まえ、イモリかヤモリかトカゲか園児たちの意見が分かれた。観察ケースに入れ、観察したり、友達と図鑑で調べたりし、「腹が赤い」という特徴から「アカハライモリ」だということがわかった。その後、「ヤモリとイモリどう違うんだろう？」と疑問に思い、家庭での体験を話したり、再度調べたりして違いを見つけることができた。
　何度もビオトープで遊び、アカハライモリを捕まえることで、生き物に対して苦手意識があった子も友達の励ましや友だちが興味をもって関わる姿から触ることができるようになった。
　一人で発見する喜びから友達と一緒に発見する喜びや楽しさへと変化していく姿が見られ、友達関係の深まりも見られるようになった。また、同じアカハライモリでもお腹の模様やしっぽの形の違いに気付き、自分と重ね合わせる姿も見られ、他人と違っていいんだという思いも感じとった園児もいた。